
研究領域としてのスポーツ文化

杉山英人

千葉大学教育学部

Sport as an Academic Field of Study

Hideto SUGIYAMA

Faculty of Education, Chiba University

Abstract

The aim of this paper is to discuss sport as an academic field of study not from natural scientific but cultural viewpoint. There has occurred confusion in the field of study of physical education and sport. For instance, sport as culture is discussed in the study of physical education, and school physical education is discussed in the study of sport. Needless to say, both fields are closely connected. However, confusion originally results from the lack of the consciousness of their conceptual difference. Therefore, the study of sport as culture should accompany the framework of education or physical education.

Regardless of this situation, there has appeared the possibility of the study of sport as a new field. This possibility originates both from the active relation between scholars of the field of sport and of other fields, and from the presentation of new viewpoints and approach in other fields of study. Therefore, whether sport as an academic field of study can establish its own and new field of study or not, is, first of all, based on whether sport is discussed in the right relation to its relevant fields of study, and so on whether sport as a field of study can contribute to the study of its related fields by giving new knowledge.

はじめに

日本体育学会が設立されて既に半世紀近くたつ。その間、会員数は増加の一途をたどり、既に 7,000 名近くを数え、組織も各専門分科会に細分化されてきた。とりわけ、その分科会がそれぞれ独立学会化しつつあるのが最近の顕著な傾向である。このように一つの学会として、他に例を見ないほどの巨大化と独立化という一見あい矛盾するような現状に対して、体育学会も第 46・47 回大会において、学会本部自らがこの問題に関わるシンポジウムを企画してきた¹⁴⁾。そこでは、体育学ないしは体育学会のアイデンティティが問われていると言える。このことは、第 46 回大会の体育原理専門分科会において企画されたシンポジウムのテーマである「『体育』の名称論議」とも密接に関わってくる問題、即ち、研究領域の内実の問題である。

例えば、体育学会の体育原理専門分科会の発表内

容を見ると「体育」だけではなく、教育との関連性を直接的には問わない「スポーツ」それ自体の文化性を探求するものも含まれる。しかし、これはスポーツの文化性そのものを探求する領域が存在せず、従ってその成果を発表する場が欠如しているためではない。なぜなら、既に「体育・スポーツ哲学会」という独立学会が存在して 20 年近くたつからである。逆に、体育・スポーツ哲学会において、学校体育の問題が問われてもいるのである。両者間に関連性があることは言うまでもない。しかし、実際には、両者の特質及び相違が曖昧のままにされているためにこのような状況にあると言わざるを得ない。この問題は、体育学会の他の専門分科会と関連独立学会との関係についても言える。例えば、スポーツ史学会が設立されて 10 年がたち、他の学問領域の研究者との積極的な交流を図りながら、スポーツ文化の史的研究が活発になされてきているが、体育史専門分

科会との関連が明確になっているとは言い難い。スポーツ史学会でも体育史研究の発表は見られるし、体育史専門分科会の定例研究集会でスポーツ史研究に関わるシンポジウムが企画されてもいるのである。

このような問題は、各研究領域の明確化が未だになされていないというだけでなく、より根源的には、「体育」及び「スポーツ」の概念規定が明確になされてこないままにきたことに真の原因があるといえる。このことを端的に示しているのが、未だに使われることがある「体育・スポーツ」という表記である。これら二つの用語が併記されていれば、一般的には、二つは同様のものという印象をあたえる注 1)。そこで本研究では、体育とスポーツとの概念の相違に留意しつつ、特に、研究領域としてのスポーツ文化に焦点を当て、これまでその研究領域が不明瞭となってきた経緯と現状を批判的に検討することにより、研究領域の明確化と今後の可能性を論ずるものである。

学問体系における体育学

スポーツを研究領域とする場合、制度上、それは体育学に含まれてきた。体育学は、科学研究費の領域区分において、他の学問分野と違い「複合領域」の一つと見なされている。このことは、体育学会の組織構造を見れば当然といえよう。その内容は、自然科学、人文・社会科学領域全般にわたっている。そこで、当然のことながら、体育学の内容を構成する各領域は、形式上、各学問領域と密接な関係を持つことになる。形式上と言ったのは、各領域の名称からいってもそうなるという意味である。ここで立ち現れる問題は、形式上の関係が実質を伴っているのか、あるいは伴ってきたのかということである。この点については、佐藤⁸⁾やD.ベスト³⁷⁾の根本的な批判により明確になっている。つまり、体育学会の各専門分科会の名称が「体育〇〇学」—これは、「スポーツ〇〇学」といった場合も同様である—となっており、常識的に言えば、「〇〇学」に相当する学問分野が基底詞たる「親学問」であり、「体育」は「親学問」の領域を規定する限定詞といえる。なぜなら、「体育〇〇学」という以上、「〇〇学」の一領域を占

めることになるからである。しかし、このことは必ずしも、「体育〇〇学」と、いわゆる「親学問」との関係が従属関係にあることを意味しない。

そうすると、「体育〇〇学」あるいは「スポーツ〇〇学」が、独立の研究領域として確立するためには、少なくとも、「親学問」や隣接領域からの体育・スポーツ関係領域に対する学問領域としての認知が必要となる注 2)。ここでの認知は、単純なものではなく重層的なものとなる。例えば、体育という教育領域を哲学的に探求する「体育哲学」を例に取れば、まず親学問は、基底詞たる「哲学」であるが、より直接的な関係にあるのは「教育哲学」である。そこで、果たして「体育哲学」が「教育哲学」の中に正当に位置づけられているのかどうかということが問題となる。そのことなしに、「親学問」たる「哲学」における認知へと一気に飛躍することはできないはずである。「スポーツ哲学」の場合には事情が異なるが、そこでは、「体育哲学」と「スポーツ哲学」との領域の明確化という問題が立ち現れる。いずれにせよ個別領域を含めて「体育学」が制度化されて既に大分たつたが、果たして、「教育学」の中に適切に位置づけられているかどうかは全く別な問題なのである。確かに、過去において、教育学研究の中で体育が扱われてきた例を挙げるができる^{1,4,10,34,35)}。ただし、学会というもう一つの制度からみれば、体育学会が教育学会と密接に交流してきたわけではなく、独自の発達をしてきた歴史がある。

しかし、このような独自な発達も大きな問題を抱えている。端的に言えば、この問題も結局は「体育」の概念規定の欠如に起因するものである。「体育哲学」を例にとれば、それは、佐藤⁸⁾の議論の出発点でもある「体育」即ち、「身体教育 physical education」を論ずる際の方法論の誤謬に対する批判に特に現れている。つまり、「身体教育」の基底詞たる「教育」概念の検討なしに、限定詞たる「身体」のみがそれ独自に、つまり、教育という文脈を離れて検討されてきたのが、いわゆる「体育哲学」ないしは「体育原理」の歴史である。しかもその際、哲学の主要領域の一つである身体論そのものに対する誤謬とそれを体育に適用する際の誤謬という重層的な誤謬に基

づいて体育哲学が展開されてきたのである。ここで、いわゆるとしたのは、「体育哲学」が学的体系を未だ確立していないという意味である。いずれにせよ、学問領域としての独自性及びその正当性を強く主張する試みが、かえって、それを曖昧なままにしてきたのである。この意味で、親学問との適切な関係から新たな教育研究の可能性を実現した例であるイギリスにおける教育哲学の確立が大いに参考となる。

用語としての「スポーツ学」

最近、「体育〇〇学」とは別に「スポーツ〇〇学」が主張されてきている。ただし、これは、「体育〇〇学からスポーツ〇〇学へ」という主張とはなり得ないものである。従って、「体育科学」から「スポーツ科学」へという流れのように「体育〇〇学」から「スポーツ〇〇学」へという研究のシフトが体育学会の各専門分科会で生起するならば大きな問題を生ずることになる。あるいは、このような流れの中で、「スポーツ〇〇学」と名称変更し、その中で旧来の「体育〇〇学」も含めるという立場も同様に大きな問題を抱えるのである。しかし、このこと自体は、先に指摘した問題の根本にある「体育」と「スポーツ」との概念区分の明確化にとっては良い傾向といえる。

これまで体育とスポーツとの概念構造の相違に対して無自覚なため、両者の研究領域が不明瞭なままにされてきた。内的状況から言えば、個々の研究者たちが、多くの場合、大学では体育学部ないしは教育学部の保健体育科、あるいは旧教養部の一般体育に所属しており、そのための自己正当化が要求されてきた。その典型的例が、先の大学改革での一般体育の必修科目から選択科目への移行である。現在の例で言えば、学校体育における選択化と時間数の減少の問題である。また、スポーツという文化を研究しようとする場合、体育学会に代表されるように、制度上、どうしても体育という教育的文脈が直接的にも間接的にもまつわりついてきた。そのため、研究それ自体が非常に限定されたものにならざるを得ず、このことが研究領域だけでなく研究者に対しても桎梏となってきた。それを払拭するために、文化として長い伝統のあるスポーツに対して、あえて「スポ

ーツ文化」あるいは「文化としてのスポーツ」^{5,7)}という用語を使用し、その文化性を強調せざるを得ない状況にあった注 3)。体育学会の名称問題には、体育という名称が、スポーツという研究領域における学問・科学の発達への阻害要因となっているという認識が少なくともあると考えられる。そのような煩わしさを除去するために、体育という名称ではなく、スポーツという名称を採用しようとするには、研究者のジレンマに対する一つの回答を見て取れる。この意味で、いわゆる「体育からスポーツへ」ということではなくて、「体育学」に対して独自の領域としての「スポーツ学」を提唱することの意義は大きい。この「スポーツ学」という用語には、従来の研究上の桎梏に対する批判と、研究領域としてのスポーツの可能性に対する新たな知的探求の要求との二つの意味が込められていると言える。

スポーツ学という用語だけを見れば確かにその使用は増えつつあり、市民権を獲得しつつある^{3,13)}。例えば、試みにインターネットでの「スポーツ学」の検索例を挙げてみる。『サッカーの社会学』(NHKブックス、1994年)の著者の高橋義雄が、sportologyという用語を用い、「SPORTOLOGY —スポーツ学のすすめ」というタイトルでサッカーを中心に幅広い範囲にわたるコラムを連載している注 4)。また、京都教育大学 120 周年記念スポーツイベント「がんばらないスポーツの祭典—国際生涯スポーツフェスティバル—」に「シンポジウム・スポーツ学事始め(スポーツ観の交流)」が含まれている。具体的には、「スポーツ学あれこれ・公開座談会—がんばらないスポーツから見えてくるこれからの教育—」というテーマで、演者にはイギリス史や大衆文化論の専門家等が含まれている注 5)。「スポーツ学」という名称が一般化しつつある例は、大学の科目名等にも見られるが注 6)、その説明が、従来のコーチ学と同様な場合もある。また、『スポーツ学のみかた』¹³⁾の巻頭において、寒川が明確に「スポーツ学」の可能性を解説しているにもかかわらず、その宣伝文句は次のようなものである。「カール・ルイスや野茂英雄、松井秀喜らの驚異的技術を科学的に分析し、アトランタ五輪の日本人選手不振の原因をメンタル面で探り、

ラグビーの平尾誠二やアメフトの水野弥一などの勝つための戦術に迫る、多方面からとらえたスポーツ学の入門書。」注 7)これも、まさにコーチ学の説明そのものである。もちろん、コーチ学はスポーツ学の一領域を占めるものではあるが、これでは、「スポーツ学」は「コーチ学」と同義、あるいは、「コーチ学」を中核にして「スポーツ学」は構成されるものという印象を与える。このように、「スポーツ学」という用語が本来担うべき新たな知の体系に対する認識が十分かどうかは疑問が残るのである。つまり、「スポーツ学」という新たな知の可能性は提示されているが、それが新たな知の体系を構築できるのかどうかは今後の課題として残されているといえる。

スポーツ研究の現状と可能性

研究領域としてのスポーツ文化の可能性は、まず、スポーツとそれに関わる諸領域との結びつきという形で現れる。例えば、中村は『スポーツの風土』¹⁹⁾において、「スポーツと〇〇」という形で、研究領域としてのスポーツ文化の可能性を 27 例提示している。その成果として同氏の一連の研究をあげることができる²⁰⁻²⁶⁾。ところで、「スポーツと〇〇」という形では、この用語自体あまり学問的印象を与えず、どちらかといえばエッセーのタイトルという印象を与える。ところが、これが「スポーツ〇〇」という用語になったとたん、ある種、学問的印象を与えるのである。つまり「スポーツ〇〇」という用語の下に一つの独立した学問領域あるいは少なくとも研究領域の存在を暗黙のうちに想定しているのである。例えば、『現代スポーツ百科事典』¹⁵⁾では、「スポーツと〇〇」とされていた項目が、『最新スポーツ大辞典』¹⁶⁾では、「スポーツ〇〇」とされている。この変化を見れば、それだけの成果が蓄積されてきたか、あるいは、研究領域としての認識が以前よりも高まったという印象を与えるのは当然であろう。更に言えば、これに「論」を付与して「スポーツ〇〇論」注 8)とすれば形式上は学問領域ないしは学問体系としてより完成されたものに近づく。「論」の代わりに「学」が付与され、「スポーツ〇〇学」とされればほぼ完璧と言えらる。学問的体裁を考えた場合、

ほぼこのような流れが考えられる。

このような流れの端緒とも言うべき体系的研究が、1970 年代後半になされた『シリーズ スポーツを考える』⁶⁾である。このシリーズの宣伝文句は、「スポーツ研究の魅力に満ちた新分野を意欲的に開拓する」であった。しかし、このシリーズに続くような体系的成果は、『スポーツ文化論シリーズ』²³⁾を例外として、残念ながら未だ現れていないといえる。しかし、このシリーズが提唱した魅力に満ちた新分野であるスポーツ研究は、最近、他領域の研究者との積極的な交流の中で新たな潮流を形成しつつある。体育学会第 47 回大会の組織委員会シンポジウム「スポーツを考える—スポーツから見た現代社会—」では、司会者を除いて、3 名の演者すべてが他領域で活躍する研究者であった³³⁾。更に、個別領域では特にスポーツ社会学やスポーツ史を中心に、同様な試みが活発になされつつある。

ところで「スポーツ学」や「スポーツ研究」という用語は、単なるスポーツに関わる個別研究領域の寄せ集めを意味するものではない。少なくともそれは、スポーツに関わる研究領域の親学問に対する新たな知見の付与という可能性の集合体でなければならない。もちろん、個別領域である「スポーツ〇〇学」の集合体を「スポーツ学」と呼ぶことも可能ではある。また、「スポーツ学」という新たな学的体系が仮に成立しないとしても、そのことは研究領域としてのスポーツの可能性を少しも否定するものではない。これは、イギリスにおける体系的な「教育学 pedagogy」の欠如が、教育研究の貧困を意味するものではないことと同義である³⁹⁾。更に言えば、独自の学的体系の有無に関わらず、研究領域としてのスポーツの可能性を論じたものもある^{37,38)}。あるいは、実際に、複合領域としてのスポーツに対して様々な学問分野の研究者がそれぞれの専門分野に基づいて共同研究を進め、着実に成果を出している例もある¹²⁾。

まとめ：新たな潮流

最近の傾向として、他領域で活躍している研究者による刺激的なスポーツ研究をあげることができる

2,17,18)。これと同様の傾向が、身体教育においても見られる。体育という場合、どうしてもスポーツを中心とする身体運動を媒介とした身体教育に限定されてしまう。しかし、ここでも、他領域から新たな身体教育の可能性を追求した刺激的な論考が現れてきている²⁷⁾。これは、閉塞状況にある体育学会に対して、新たな知の領域を開拓する可能性を提示するものといえる。また、体育学会内部からも同様の刺激的な論考が現れつつある³⁰⁾。

結局のところ、スポーツ学という用語を用いるにせよ、スポーツ文化を研究対象とする場合、まず、その方法論の基盤となる学問領域との密接な交流を図ることが要求される。それが、研究領域としてのスポーツ文化の確立への第一歩となるのである。しかしこのことは、単なる親学問における方法論の適用ということではない。その次元に留まるならば、それは従属関係に留まることを意味することになる。研究領域としての独自性は、親学問に対していかなる新たな知の可能性を提示できるかどうかにかかっているのである。

注

注 1) これについては、近頃、佐藤^{8,9,11,28,29)}が両者の概念の相違を、「実体概念」及び「関係概念」に基づいて明確化し、特に、体育概念の理論構築を果たした。そのため、今後は、体育とスポーツとの概念上の混乱に起因する研究領域の不明瞭化はなくなることが期待される。

注 2) 体育学では、これまで様々な形でその学問的存立の正当化が図られてきた。そのなかで、より学問的という体裁をとるために「科学」という名称を使うこともなされてきた。「体育科学」にせよ「スポーツ科学」にせよ問題を孕んでいる。この問題については、樋口の一連のスポーツ科学論批判^{31,32)}で詳細に論じられている。ところで、スポーツ社会学は、社会学において認知されつつあるようである。例えば、日本社会学会の機関誌である『社会学評論』の巻末に掲載される「社会学文献目録」の「Ⅲ. 論文の部」は、「1. 社会哲学・社会思想・社会学史」から「33. 総論・概説」まで 33 の領域区分がされている

が、その一つに「余暇・スポーツ」が取り上げられている。

注 3) 「スポーツ文化」という場合、スポーツ科学に代表されるように、自然科学領域としてのスポーツに対する文化領域としてのスポーツという自覚が強く込められてもいる

注 4) <http://2002j.topica.ne.jp/sporto/sp.html>.

注 5) http://www.kyokyo-u.ac.jp/KINEN/kinen2_6.html.

注 6) <http://www.andrew.ac.jp>, <http://sports-gw.edu.mie-u.ac.jp/>, <http://search.yahoo.co.jp/edu/campus/kz084600.html>.

注 7) <http://www.opendoors.eccosys.co.jp/span/shoseki/s9701.htm#0120>.

注 8) 「スポーツ〇〇論」について言えば、それが学的体系を備えていないことは欠点ではない。それは、学的体系では論じきれない領域を取り扱おうというある種開かれた知的探求の現れといえる。

参考文献

1. 阿部生雄他著『体育史』(『世界教育史大系』第31巻)講談社, 1975年.
2. 今福龍太『スポーツの汀』紀伊國屋書店, 1997年.
3. 江田昌祐監修『スポーツ学の視点』昭和堂, 1996年.
4. 太田堯他編『身体と教育』(『現代教育学』第14巻)岩波書店 1962年.
5. オモロー・グルーベ著/永島惇正他訳『文化としてのスポーツ』ベースボール・マガジン社, 1997年.
6. 影山健他編『シリーズ・スポーツを考える』(全5巻)大修館, 1977-78年.
7. 佐伯聰夫「オモロー・グルーベ著 文化としてのスポーツ」『体育科教育』44, 1997年5月.
8. 佐藤臣彦『身体教育を哲学する』北樹出版、1993年.
9. 佐藤臣彦「体育とスポーツの概念区分に関するカテゴリー論的考察」『体育原理研究』第22号、1-12、平成3年度.
10. 菅井準一他編『健康教育』(『現代教育研究』第15巻)日本標準テスト研究会, 1969年.
11. 杉山英人「佐藤臣彦著 身体教育を哲学する」『千

- 葉大学教員の選んだ 100 冊』千葉大学付属図書館、42、平成 7 年。
12. 杉山英人「The Warwick Centre for the Study of Sport in Society について」『ひすぼ』No.31,5,1996 年
13. 『スポーツ学のみかた』(アエラムック)朝日新聞社,197 年。
14. 『体育の科学』Vol.45,9 月号,1995 年、Vol.47,1,2 月号,1997 年。
15. 日本体育協会監修『現代スポーツ百科事典』大修館,1970。
16. 日本体育協会監修『最新スポーツ大辞典』大修館,1987。
17. 多木浩二『スポーツを考える—身体・資本・ナショナリズム—』ちくま新書,1995 年。
18. 富山太佳夫『空から女が降ってくる—スポーツ文化の誕生—』岩波書店,1993 年。
19. 中村敏雄『スポーツの風土—日米比較スポーツ文化—』大修館,1981 年。
20. 中村敏雄『オフサイドはなぜ反則か』三省堂選書,1985 年。
21. 中村敏雄他『現代スポーツ論』大修館,1988 年。
22. 中村敏雄『スポーツルールの社会学』朝日選書,1991 年。
23. 中村敏雄編著『スポーツ文化論シリーズ』(全 10 巻)、創文企画、1993 年～。(現在、8 巻まで刊行。)
24. 中村敏雄『メンバーチェンジの思想—ルールはなぜ変わるか—』平凡社ライブラリー,1994 年。
25. 中村敏雄『スポーツルール学への序章』大修館,1995 年。
26. 中村敏雄『日本のスポーツ環境批判』大修館,1995 年。
27. 野村雅一他編『叢書 身体と文化』(全 3 巻)大修館 1996 年～。(現在、菅原他編『コミュニケーションとしての身体』(第 2 巻,1996 年)が刊行。)
28. 樋口聡「哲学の方法への新たな視角—分析装置としてのカテゴリーの提示—」『週間読書人』1993. 9.13.
29. 樋口聡「Book Review 佐藤臣彦著 身体教育を哲学する」『体育の科学』Vol.43,863,1993(10).
30. 樋口聡『遊戯する身体—スポーツ美・批評の諸問題—』大学教育出版,1994 年。
31. 樋口聡「スポーツ科学論序説:(I)序論」『広島大学教育学部紀要』第 2 部第 43 号,135-144, 1994.
32. 樋口聡「スポーツ科学論序説:(II)イメージの生成—わが国におけるスポーツ科学の誕生—」『広島大学教育学部紀要』第 2 部 第 44 号,113-23,1995.
33. 樋口聡「[組織委員会企画]スポーツを考える—スポーツから見た現代社会—」『体育の科学』Vol.47,2 月号, 99-101, 1997 年。
34. 前川峰雄他編『身体と教育』(『教育学全集』第 10 巻)小学館,1967 年。
35. 松田岩男他編『身体と心の教育』(『シリーズ 人間の教育を考える』), 講談社,昭和 56 年。
36. Best, David, *Philosophy and Human Movement*, George Allen & Unwin, London, 1978.
37. Best, D., "Degree Studies in Human Movement and Physical Education", *J. of Human Movement Studies*, Vol.4, No.3, 119-28, 1978.
38. Best, D., "A policy for the study of physical education and human movement", *J. of Human Movement Studies*, Vol.6, No.4, 336-47, 1980.
39. Simon, Brian, "Why no pedagogy in England?" in B. Simon, *Does Education Matter?*, Lawrence and Wishart, London, 77-105, 1985.

(平成 10 年 1 月 10 日受付)